

令和6年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価（3月31日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①幅広い進路希望に対応できるよう教育課程の継続的見直しを行う。 ②進路実現の基盤として、自らの学習を管理して主体的・対話的で深い学びを実践する力を育成する。 ③探究的な学びを通じて課題発見力・解決力の向上、自己肯定感の高揚、社会を生き抜く力の育成伸長を図る。	①多様な進路実現に向け、将来を見据え、体系的に科目選択ができるような履修指導を組織的に行い、進路指導に接続させる。 ②進路の実現に向け自らの学習に継続して取り組み、主体的・対話的で深い学びを育む授業づくりを推進することで、授業改善へとつなげる。 ③探究的な学びを通して、課題発見力・解決力の向上が図れているかを「生徒による授業評価」の内容を工夫する。	①多様な進路実現に向けて主体的な科目選択ができるよう、履修指導の在り方についての共通理解をもって指導を進め、組織的な履修指導を行う。  ②スケジュール帳等を活用し、自らの学習を管理し、学習意欲・知的好奇心の向上に向けた取組を推進する。  ③主体的・対話的で深い学びを実現するために普段の授業改善に取り組み、「生徒による授業評価」の実施方法を工夫する。	①幅広い選択科目の中で進路の実現に向けた履修指導を実施することができたか。 また、講座数や時間割の調整を通じて生徒の主体的な進路選択を保障することができたか。  ②進路の実現に向け、スケジュール管理を推進し、生徒一人ひとりが「自己調整学習」への理解を深めることができたか。  ③探究的な学びを通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現できているか「生徒による授業評価」により認識させることができたか。	①教育課程説明会や各担任、各教科の先生方から生徒一人ひとりが自らの進路に向けた科目を履修できるよう、履修指導を一貫して行うことができた。  ②進路の実現に向け、スケジュール管理をグーグルカレンダーを利用し、自らが学習できる時間を効率よく考えることができるようになった。また、自己調整学習に向けた理解度を上げることができた。  ③主体的・対話的で深い学びに関する評価の研修会を実施し、授業に対する意欲を高めることができた。	①選択科目を設定する中で閉講をせざるをえない状況や選択者が溢れ、抽選になった科目もある中で、選択枠の調整は来年度以降の課題であると考ええる。  ②スケジュール管理だけではなく、「自己調整学習」には自らの意欲を高めると考えるので、授業内での興味関心を高められるような導入部の改善を考えていきたい。  ③生徒評価の振り返りを各教科の先生方が行い、分析し、課題発見力・解決力を向上させるような授業が行えるような働きかけをしていきたい。	①履修指導の徹底とキャリア教育の両輪を併せて力を入れており、本校の進むべき方向性がしっかりと意識されていることを確認した。 ②「調べ学習に終わらせない、その先を追究する」指導が定着しつつあり学校の進歩を感じた。この流れをぜひ進めてほしい。 ②現在進行している教育改革の中で、授業改革は喫緊の課題だが、有志の検討会や相互の授業見学を機能的に設定する戦略が、全体の授業改善ドライブへと意識されており、今後の進展に期待が持てる。 ②アンケートでは、本校の教育に対する満足度が、9割を超している。これは本校開校以来の良い数字である。	①新教育課程がグランドデザインやスクールポリシーを実現できるかの再検証及び、新たな設置科目の提案や、現在ある科目の位置づけの確認作業なども終了した。履修指導が進路実現につながるよう、更なる強化を図る必要がある。 ②③新学習指導要領に取入れた授業展開や学習評価に取り組むべく、年間の定期テストを3回とし、授業中における取組の様子を最大限に評価の対象とした。新学力観に基づいた授業を実現させる組織的な授業改善がさらなる課題である。	①将来を主体的に選択させるために、適切な履修指導をする。情報共有を組織的に行い、履修指導の在り方について全職員の共通理解を図る。新教育課程の学力観や、観点別評価について、全職員が学べる機会を確保するための研修を適宜行う。 ②③指導と評価の一体化の推進を継続して行い、授業改善へとつなげる。また、授業改善がどの程度進んだかをアセスメントする「生徒による授業評価アンケート」について、信頼性のあるデータとなるように取り方を引き続き工夫していく。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	①一貫した生徒指導に加え、すべての教職員が高い支援意識を持ち、多様な特性を理解し確かな支援につなげる体制を構築する。 ②学校行事、部活動等への主体的な取組を促し、豊かで活力ある学校生活を創出する。 ③グローバルな視野と高い人権意識を身に付け、多文化共生社会の実現に貢献できる人材を育成する。	①全職員が生徒支援意識を持ち、SCやSSW、教育相談コーディネーター、養護教諭との連携を密にして個別支援の充実・向上を図る。 ②生徒が中心となり、他者と協力して諸活動を創造できるよう支援する。 ③生徒同士が互いの文化を理解し思考の多様性に気付くことができる教育の場面をつくる。	①基本的生活習慣の確立、情報リテラシー及びモラルの向上を図る。 ①すべての教職員が高い支援意識を持ち学校生活のあらゆる場面で生徒の発信を逃さない強固な支援体制を構築する。 ②長期的視点に立ち計画的に生徒の主体的活動を支援する。 ③「知る・つながる・創る」という多文化共生の理念を具体化する。	①昨年度と比較し、病気や通院以外の遅刻や欠席数が減少したか。  ①教職員同士で生徒の変化等を察知・情報共有をし、必要に応じてSCやSSWに繋げることであったか。 ②部活動等の機会に、生徒が中心となり、他者と協力して諸活動を創造できるよう支援することができたか。  ③LHR等を活用し、各年次にあわせた多文化共生推進教育プログラムを展開することができたか。	①全職員が生徒に対して積極的に関わりを持ち、変化を敏感に察知し、情報の共有や必要に応じてSCやSSWに繋げることができた。 ②生徒が中心として活動を進めていけるよう、目標やスケジュールを示し、先の見通しを立てて、活動させていくことが多くの場面できた。	①かながわ子どもサポートドックの活用方法より効果的にする方策を考え、よりよい生徒支援を行っていくことができるようにすることが課題である。  ②他者と協力して、活動を進めていくこと、多くの仲間を巻き込み諸活動を進めていくことが課題である。	①生徒のSOSの積極的な受信に加えて、サポートドックを有効に機能させた。生徒のちょっとした変化をも全体でキャッチしようとしている姿勢はとても好ましい。配置の充実が見られるSC、SSWとの協働を行い、今後とも生徒の困り感を把握していただきたい。 ②生徒が主体的な行事の運営については粘り強く追及してほしい。 ③多文化共生のコンセプトが深められる方向に進んでいる。県内で最も進んでいるとの評判がある。外国に繋がりのある生徒の自己肯定感を高めていただきたい。	①支援を必要とする生徒をスクールカウンセラーにつなげ、さらに必要に応じてスクールソーシャルワーカーとの適切な連携を図ることができた。 ②スポーツ大会では、生徒だけで企画、運営ができたが、全体の進行を見通しての運営が十分でなかった。適時の支援態勢が課題である。 ③国際交流では、今後とも日本語指導者や多文化教育コーディネーターと連携を図り、生徒の自己表現の場を模索したい。	①年度初めに教育相談体制について周知する。SC、SSWと連携した個別の支援をより積極に行えるよう、校内体制を整える。 ①全職員が生徒支援の意識を持って生徒の変化に対する感度を高め、それを支援につなげる。 ②行事等で失敗も有益な教育であると生徒、教員で共有し生徒の積極的姿勢を引き出す。 ③国際フェスタを更に国際交流委員会を中心とした企画へと推進する。多文化共生、国際理解を提唱する存在として、本校独自の取組を進める。
3	進路指導・支援	①「キャリアⅠⅡⅢ」での一貫したキャリア教育を推	①②基礎学力の向上を図りつつ、多様な学びを生かした指導	①「キャリアⅠⅡⅢ」での各種取組が継続性・発展性を持つ	①②3年間を一貫するキャリア教育プログラムを検討できたか。 ①②自分自身の視野を	①1年次において、次年度からの課題研究にもつながる上級学校の「自ら問いを立てる」「協働する力」な	①課題に対して、どのようにすれば、深く考えることができるのか、その方法も継続的に学ばせる	生徒アンケートより、総合学科としての教育が成就していると評価できる。	①②校外学習や高大連携などの講座に、積極的に参加した。校外学習の有益性を強く説き	①②課題研究を効率的に行うためには、他者との対話の機会拡大が必要である。また、探究的な学

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価（3月31日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
		進し、校内外での多様な学びと体験を通じて自分の在り方・生き方に対する自覚を深めさせる。 ②「課題研究」での探究活動を充実させ、計画性を持って課題に取り組み、自らの興味・関心を追究することで進路実現・自己実現を目指す。	に学校全体で取り組む。 ②課題研究のテーマ設定を大切にし、調べ学習に留まらない課題研究の取組をより充実したものにする。 ②自分の適正に合った最適な進路先や受験方法を選択する力をつけさせるための指導体制を充実させる。	よう系統的なキャリア教育を計画・実践する。 ①キャリアパスポートで自分自身を振り返る。 ②探究の手法を理解し、テーマに対する自らの仮説を他者に対して根拠を持って論理的に説明できる力を身に付けさせる指導を実践する。 ②生徒の視野を広げるための説明会や講演会を外部機関も積極的に活用しながら実施する。	広げたり、振り返ったりする機会を多く設定することができたか。 ②探究の時間においては、他者との意見交換や対話の場を設けるなど、テーマや探究内容を深化させるためのアプローチができたか。	どの以下らを育成する主体的学習のプログラムを実施した。 ①キャリアパスポートの様式や時期を変更し、実施し、自分自身の振り返りの機会を多く設定することができた。 ②説明会や講演会の機会は例年度並みに実施できた。探究の進め方を工夫し、自らの課題や現状を理解しやすいアプローチをすることができた。 ②小グループで探究活動を展開することにより、意見交換や他者の話を聞く場面が増えた。	必要がある。 ①学習の振り返りとのすみわけやキャリアパスポートを記入させる際の教員の伝え方やサポート方法も整えていく。  ②担当者同士で探究の進め方を意見交換しながらより充実したアプローチ方法を研究していく。  ②他者との意見交換や対話の場を設けることができるような探究活動のスケジュール作成に努める。	①3年間の一貫したキャリア教育の観点については課題把握に留まったようだが、次年度はこの課題の検討を進めていただきたい。 ①生徒が主体的に自分のキャリアを考える機会を今後とも提供してほしい。 ②「課題研究」が「調べ学習にとどまらないようにする」という流れが生まれてきたことを評価したい。	積極的に校外学習に参加するよう推進していく。 ①②「課題研究」の研究テーマの決定をどのようにシステム化するかが課題である。 ③大学進学者が例年より増加した。総合型での合格率が増加した。生徒が自らをアピールする形での進路実現には、3年間を通じた指導体制の構築が必要である。	びを実践することで進路選択の幅が広がることから課題研究の充実を図る。 ③目標や適性を自覚させ、最適な進路先や受験方法を選択する力を付けさせる。奨学金等の利用を含め、進学後の経済的な援助に繋げていく。
4	地域等との協働	①インターンシップ等への参加を促し、地域社会が持つ教育力を積極活用してキャリア形成意識の向上を図る。 ②地域との交流を推進し、地域の課題に目を向け、その解決を図ろうとすることで、豊かな人間性や社会性の涵養を図る。	①組織的なボランティア活動や地域貢献に努め、地域に対する感謝の意識を育む。また、地域への情報発信や地域からの情報収集を積極的に行い、連携を強化する。 ②防災教育や防災研修、防災訓練を継続的に行うことで学校全体の防災意識を高める。	①総合学科の特性を生かして、生徒が主体的・計画的に地域活動に参加できる体制を構築する。 ①多様な活動を保障するため他校種や行政機関との連携を強化する。 ②地域の防災活動や美化活動への主体的参加を促す。	①②インターンシップや学校外での学修に参加する生徒が増えたか。その結果、参加した生徒の地域社会の課題等を自らの課題ととらえる意識が高まったか。  ②校内での防災教育および防災研修を継続的に行うことができたか。学校全体の防災意識を高めることができたか。	①学校外での学修については、今年度も多く生徒が参加した。インターンシップに関しては数名にとどまった。  ②校内での防災教育は雨天のため教室で行った。各年次で地域清掃を行い、地域の美化に貢献することができた。環境整備事業では、保護者と協力して美化活動を実施することができた。数年ぶりに職員向けDIG研修を実施することができた。	①今後も継続して学校外の学修に参加できるように、参加先を広げたり、アナウンスの方法を工夫したりしていく。  ②地域清掃と地域の防災活動を同時に実施できないか、検討していく。（例えば、生徒向けのDIG研修を実施して、地域清掃時に危険箇所を確認してまわる、など）	①近隣の要請に応じて小学校との交流をふかめ、子ども達と勉強や遊びを通じたコミュニケーションの場を作った。今後ともこうした機会を利用して学校外における体験ができる機会を作っていただきたい。 ①校内清掃活動がPTAの協力も得て楽しいイベントとして復活実施できたことはとても良かった。 ②避難所開設も視野に入れた防災訓練の検討も進められたい。	①新型コロナの収束に伴いボランティアや地域と活動する機会が増えた。 ①赤い羽根共同募金の校外募金活動が実施できた。個人のボランティア参加が課題である。 ②防災訓練の中で、生徒への防災意識を高める活動ができた。 ②東日本大震災時に幼少期で、震災を実感しづらい生徒が入学してくる。防災訓練等で継続的に防災意識を高める必要がある。	①ボランティア活動や地域貢献活動に参加できる声掛けとボランティアに関する情報を積極的に生徒へ提供し、参加を促す。 ①福祉厚生委員にも参加を要請し、ボランティアに関する情報発信をGoogle Classroomを利用して強化する。 ②防災訓練が形だけの訓練とならないように企画を立て、実践的な工夫を凝らして計画実施する。 ②防災用品は1年単位ではなく数年単位で計画的に購入、更新を行う。
5	学校管理 学校運営	①業務の抜本的見直し、ICT化等の業務改善に組織的に取り組み、生徒と向き合う時間の拡充を図る。 ②ハラスメントのない職場づくりを実現し、職場の心理的安全性を高め、教職員のワークライフバランスを推進する。	①②授業教室の環境を整備し、さらにデジタル化を進めるとともに、計画的に機器や器具刷新を図る。 ①②より学習活動に効果的な端末やアプリなどを利用し、情報共有を図り、会議などの校務の効率化を図る。	①②各種取組の目標や成果を検証し、業務の抜本的な見直しを行う。 ①ICT利活用の促進業務分担の見直し等を行い、効率的で多様な働き方に対応する学校運営を目指す。 ②職員間のコミュニケーションを促進し、安心安全な職場環境を構築する。	①②全ての授業教室において、ICT環境を改善するために、状況調査を踏まえ、機器や器具の刷新をすることができたか。  ①②ICT利活用を促進するための研修等を行うことができたか。  ①②グループ内やグループ間での業務を見直し、効率的で多様な働き方を推進することができたか。	①②授業教室および職員室のネットワーク環境工事が終了し、より安定したICT環境のもと、授業等を行えるようになった。  ①②ロイロノートの基本操作の研修会を開くことができた。次年度よりジャパンレッジスクールの導入を決定した。  ①職員用にネットワークプリンタやiPadを導入し、それらを活用した効率的な働き方を勧めた。	①②次年度以降に導入予定の電子黒板と、現在あるテレビをどのように併用していくかを事前に検討していく。  ①②新たに導入されるジャパンレッジスクールの、ロイロノート、クラスルームのそれぞれの利活用を推進していく。  ①②今年度内のグループの業務を見直しが出来なかったため、次年度の早い段階で見直しを進めていく。	①ICT機器がさらに充実するのに合わせて、利活用についての研修を進めていただきたい。 ②総合学科高校の職員の仕事量の多いことは大きな課題である。これについて、学校長から負担が増えないように必要度の低い業務をクラッシュする考えのあったことを確認できた。さらに働き方改革を進展していただきたい。	①ICTを活用する上で校内のWi-Fi環境は整ってきている。授業においてもICTを使用する機会が着実に増えた。一人一台PCを使用する上でWi-Fi環境について再確認をした。 ①②ICTの使用頻度が高くなるにつれ、ICT環境改善の要望も高まる傾向にある。また、ICTを利用しやすい整備を進めていく。 ②職員会議等でデジタル化やペーパーレス化が実践されつつある。	①ICT機器の整備、それぞれの機器の使用頻度や活用方法等を確認する。また、常にオンラインを用いる教室の環境を整備し、計画的に機器の購入、更新を行う。 ②職員の服務に関する申請入力については、デジタル化を推奨する。 ②マニュアル等はデジタルデータにまとめ、紙での印刷を減らし、閲覧を追求する。 ②デジタル化、ペーパーレス化を推進し、会議の効率的運営を進め、働き方改革につなげる。